

宮城学院中学校におけるNIE活動を取り入れた平和教育

—『長崎新聞』作成にいたる一連の取り組み—

丸山 仁

はじめに

宮城学院中学校では三年次の十月上旬に長崎への校外研修旅行（以下、長崎校研と略記する）を行っている。二〇〇四年度からはじまったこの長崎校研も二〇一九年度で十六回を数えることになる。

筆者はかつて中学校三年次に所属し、長崎校研の委員会担当者かつ社会科の授業担当者の立場から、この長崎校研における平和学習の取り組みについてまとめたことがあった。⁽¹⁾ その時から十数年が経った。本校ではいまも中学校三年生の学年主任を中心として、内容を一部改善したり、新しい取り組みを加えながら長崎校研をみがきあげてきている。

その一つがNIE活動との連携である。⁽²⁾ NIEとは「教育に新聞を (Newspaper in Education)」という活動である。新聞業界では一九八五年にNIE専門部会が新設されたところからその歴史が始まった。その後、教育界では二

〇〇五年に日本NIE学会が設立され、新聞業界と連携をした活動に発展してきている。宮城県のNIE活動は、二〇一八年度で三十年を迎え、宮城県NIE委員会を中心に豊かな実践が積み重ねられてきている。

本校では長く朝新聞の活動や社会科や技術家庭科などの授業のなかで新聞を活用した教育を行ってきた。そうした活動を土台として二〇一五年度から二〇一七年度までの三年間、宮城県NIE実践指定校として活動をした。⁽³⁾

そこで本稿では、長崎校研に結実する平和学習の取り組みをNIE活動との結びつきという視点から論じることとする。

なお長崎校研におけるNIE活動の二つの視点として、(1) 自分自身が一人の新聞記者となり、世の中に平和に対するメッセージを『長崎新聞』として発信する、(2) 世の中の平和に関する動向を新聞を通して学び、「平和宣言」にまとめる、というものを最初に提示しておく。

一 長崎校研の目的

まず長崎校研の目的について示しておく。長崎校研の目的は、「平和」、「歴史・文化」、「最高学年の自覚・責任」の三つの柱からなる。この三つは基本的に長崎校研開始時より現在まで変わっていない。例えば二〇一六年度の目標は、(1) 被爆地長崎における学びを通して、平和と人権を守るために、私たちは今何ができるか、何をしなければならぬかを深く考える。(2) 異国文化の漂う長崎の町を歩き、キリスト教の歴史に触れ、長崎特有の歴史が日本の文化や宗教などに及ぼした影響について考察・検証する。(3) 宮城学院中学校の最高学年として、一人ひとりが自覚と責任をもって団体行動をし、学年の団結と友情を深め、有意義な研修旅行にする、であった。

二 宮城学院中学校におけるNIE活動を取り入れた平和教育

長崎校研におけるNIE活動を取り入れた平和教育の流れは次の通りである。

- (1) 河北新報社への職場訪問(二年次 六月)
- (2) 長崎の調べ学習(二年次 夏期休暇課題)
- (3) 河北新報社による出前授業〈その1〉「新聞活用講座」(二年次 三月)
- (4) 特別プログラムによる平和学習(二年次 三月)
- (5) 「長崎レポート」作成(三年次 五、七月 七月発行)
- (6) 河北新報社による出前授業〈その2〉「取材について学ぼう」(三年次 七月)
- (7) 平和宣言の取り組み(三年次 夏期休暇課題)
- (8) 河北新報社による出前授業〈その3〉「長崎新聞をつくろう」(三年次 十月)
- (9) 「長崎新聞」作成(三年次 十月)

以下、(1)から(9)までの取り組みの概要を述べていく。

まず(1)河北新報社本社への職場訪問からはじまる。この取り組みがはじまったきっかけは東日本大震災(二〇一一年三月十一日)時、河北新報社はその翌日も休むことなく新聞を発行したが、どうしてそれが可能だったのかと疑問を持った生徒の存在であった。

この職場訪問の目的は、①「働く」ということについて学びを深めること、②働いている人がどのような課題をもつて、どのように働いているかを学び、将来、自分の力をどのように社会に活かしていくかを思い描くこと、③そのために中学生の今、何が必要なのかを考えること、にある。

内容は、大きく分けて二部構成で行う。第一部では、DVD鑑賞を通して新聞制作の過程を一通り学んだ後、新聞社の仕事についての講義を受ける。第二部では、スタッフとの懇談を行う。二〇一五年度は、整理部・営業部・デジタル推進室・企画事業部の計四つのジャンルのスタッフの方々と囲み、インタビュ形式で話を伺った。

次は(2)長崎の調べ学習(以下、「長崎レポート」と表記する)である。目的は、①長崎の歴史の調べ学習を通して三年次の長崎校研の意識づけをはかること、②調べ学習のポイントを学ぶこと、にある。

調べるテーマは、「I 長崎に関わる歴史上の人物」として、「クリンタン大名(有馬晴信・大村純忠)と天正遣欧使節」・「フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトやトーマス・ブレーク・グラバー」・「坂本龍馬」を、「II 長崎の歴史」として、「島原・天草の乱、鎖国と出島」を、「III 長崎とキリスト教」として、「踏み絵(絵踏み)」と禁教令」・「長崎二十六聖人殉教・浦上天主堂」を、「IV 長崎と原子爆弾」として、「長崎に投下された原子爆弾と核兵器、原子爆弾による長崎の被害状況」・「永井隆・如己堂」・「平和記念公園・平和祈念像」の計九つであり、そのなかからどれか一つを選択して行った。

「長崎レポート」の作成にあたって、次のことを提示した。⁴⁾

〈調べる〉

・書籍を参考にした時は、著者名・書名・出版社名・出版年を明記すること

・インターネットを利用する場合は、HPのアドレスを載せること。また参考にする情報元を十分に検討したり、いくつかの情報を比較や検討をして載せること

〈調べた内容をまとめる〉

・指定された用紙(A4版一枚)に横書き

・年表・絵・図などを入れ、わかりやすいように工夫をすること

・鉛筆で下書き後、誤字・脱字や文章のチェックを行い、黒ペンで清書をすること

次に(3)河北新報社による出前授業へその1「新聞活用講座」である。

目的は、三年次に『長崎新聞』にまとめることを念頭におきながら、その第一弾として「新聞の読み方、活用の仕方」を学ぶことである。

内容は、まず河北新報社における震災後四年間の報道のあゆみを実際の新聞記事を取り上げながら紹介していただく。さらに「新聞を楽しく読もう」と題して、新聞の読み方講座を受講し、実際の新聞を使いながら新聞のワザについて学ぶ。その上でワークショップ「あの人に伝えたい、私のオススメ記事」を実施し、自分が選んだ新聞記事をはかの人に紹介するという取り組みを行う。

具体的な流れとしては、新聞を読んで記事の一つを選び、切り抜く(五分)、ワークシートに書き込む(二〇分)、グループ内で発表(七分)、みんなの前で発表(七分)となる。

次に(4)三月に特別プログラムを組んで平和学習を行う。

目的は、三月上旬の学年末試験が終わり、三年生に進級するにあたり四月から本格的に準備がはじまる長崎校研に

向けて意識づけをはかることにある。

内容は、平和を考える映画や番組の鑑賞が中心であり、教科の取り組みと連携しながら進めることが多い。二〇一五年度は、NHKスペシャル「解かれた封印〜米軍カメラマンが見たNAGASAKI〜」を鑑賞した。国語の授業では「目撃者の眼」(『国語二』学校図書)を学んでおり、鑑賞するにあたって良い事前学習にもなった。

ある一人の生徒の感想文を紹介する。

「もし、私がジョー・オダネルと同じ立場であつたら、たくさんの人から批判を受けたら、たぶん諦めてしまい、写真をまたトランクの中にしてしまって一生開けないと思います。でも、ジョー・オダネルは批判や嫌がらせを受けても最後まで訴え続けて、とても原爆のことをアメリカ全土の人に訴えたいという思いが強かったんだと思います。

「日本に入って復讐する」という思いで軍に入り、広島・長崎の写真を撮っているうちに心を動かされて、私物のカメラで三十枚もの写真を残し、しばらくの間トランクにしまっていたけど、アメリカなどで批判を受けながらも写真展を開いたのはすごく勇気があることだなと思いました。また父の思いをうけつないで息子が活動を続けているのは素晴らしいことだなと思いました。

この映像に出てきた少年の背中の写真が一番心に残りました。その少年は一命をとりとめたものの、今でも何回も手術をしても治らないということにびっくりしました。今回のだけでも原爆の恐ろしさがすごく分かりました。⁽⁵⁾ 中学二年次までに(1)から(4)までの取り組みを行い、少しずつ長崎校研における平和学習への理解をすすめていく。長崎校研を実施する三年次となり(5)「長崎レポート」作成を行うことになる。

目的は、長崎の歴史や文化を調べ、平和について考えることを通して、十月の長崎校研で何を学んでくるかを一人

ひとりが明確にすることである。

本校で編集した「資料集」（見学場所のパンフレットなどを調べる材料として提供）や図書・インターネットなどを活用して「長崎レポート」を作成する。

この時期に合わせて七月中旬にまる一日を平和学習の日として事前学習を行う。そのなかで長崎の原爆に関係のあるDVD鑑賞を行ったり、⁽⁶⁾河北新報社による出前授業へその2「取材について学ぼう」を行う。

この「取材について学ぼう」の目的は、①十月の長崎校研の学びを『長崎新聞』にまとめるための第二弾として、現地での取材の仕方について学ぶこと、②長崎の原爆について学ぶにあたり、昭和二十年七月十日におこった仙台空襲および戦時下の報道について学ぶこと、にある。

内容は、①仙台空襲の翌日も新聞を発行した（東日本大震災時にも通じる）、②戦時下において、報道統制（検閲）のなか社説で軍を批判し新聞人として時代が終戦そして新しい時代へ動いていることを伝えることに命をかけた寺田編集局長、③戦時中の報道への反省を記した河北新報創刊五十周年の社説、④取材のいろは（取材の準備・取材・質問をする時のポイント・メモの取り方・写真を撮る）、⑤メモをとる練習（ちゃんとメモを取れたかな？確認クイズ）である。

夏期休暇に行うのが（7）平和宣言の取り組みである。長崎の地において、平和式典を行い、その中で平和に対する決意を自分たちの言葉として読み上げることが目的である。

校外研修旅行委員（クラスのまとめ役である代議員が兼務する）が話し合いながら一人ひとりが書いた平和宣言を

学年としての平和宣言にまとめている。二〇一五年度からは一人ひとりが夏期休暇の課題として平和宣言をまとめ長崎校研時に原爆資料館にお渡ししてきた。

広島（八月六日）や長崎（八月九日）の平和宣言や戦争に関する新聞記事などを参考にして平和宣言を考える。朝日新聞社のオンラインデータベース「朝日けんさくくん」で「平和」「核兵器」などのキーワードを入れて検索した新聞記事を踏まえてまとめるときもある。

二〇一六年度は、生徒全員に①朝日新聞社の特集号『知る原爆』、②二〇一五年度長崎宣言、③活水中学校高等学校（本校と交流をしている長崎の学校）の原爆の被害をまとめたリーフレットである『あの日を忘れない 旧鎮西学院中学での原爆被害』を配布した。

ひとりの生徒の例を紹介する。

一人ひとりの平和宣言より「桜組Aさん」

昭和二十年八月九日午前十一時二分、アメリカ軍が投下した一発の原子爆弾により長崎の街は「生き地獄」と化しました。

原爆で七万四千人もの人々が亡くなりました。また生き残った人々は今もなお「原爆症」に苦しめられています。原爆は人々だけでなく、全ての生き物や植物、大切なものまでも無差別にうばっていききました。

この原爆の力を知っている被爆者の方は「もう二度とこのようなことをおかしてはいけません。」そして「二度と戦争はしてはいけません」と深く心に刻んできたと思います。そしてその想いが「憲法における平和の理念」として残っ

ているのではないでしょうか。今被爆者の方の平均年齢は八十歳を超えています。世界に「被爆者のいない世代」を迎える日は少しずつ近づいている、というお話を長崎市長さんが平和宣言の際に語っておられました。被爆者の方々がいなくなったからといって、「原爆について」の意識がうすれてしまっただけだと思いません。この課題は私たち若い世代が変えていかなければいけないことだと思えます。そのためには被爆者の方々のお話に耳を傾けるべきだと思います。

被爆者の方々にはつらくて苦しくても語ってくださいます。それは「未来を守るため」と思い語ってくださいていると思います。

私たちがすべきことは「その想いを引き継ぐこと」だと思います。

長崎市長さんの平和宣言の中に「未来のために過去に向き合う一歩」という一言が自分の心にとても響きました。自分たちの未来を変えることができるのは自分たち自身です。

私は核兵器廃絶のための協力と平和の実現をつくすことをここに宣言します。

二〇一六年八月九日三年桜組〇〇〇〇（個人名）

このような一人ひとりの平和宣言を基にして、校外研修旅行委員でまとめたのが学年としての平和宣言である。次の平和宣言は二〇一六年度のものである。

一九四五年八月九日午前十一時二分。これは長崎の街が悲しみと絶望の幕を開けることになった瞬間です。この

日、長崎にいた人々は戦時中ではありましたが、いつも通りの生活を送っていました。そんな当たり前の一日を覆した魔物……それは一発の原子爆弾だったのです。たった一発の原子爆弾のために、街は破壊され、七万人もの命が奪われました。かろうじて生き残った人々も、大量の放射線を浴び、体を蝕まれ、七十一年が過ぎた今でもその後遺症に苦しんでいらっしやいます。そして、原爆は人々の命を奪っただけでなく、人々の心までも奪っていききました。

さて、今年で戦後七十一年を迎えました。今年五月には、アメリカの現職大統領としては初めて、オバマ大統領が被爆地広島を訪問しました。彼は、その際のスピーチにおいて「すべての人命はかけがえのないものです」と述べました。そう、命には国籍も性別も年齢も関係ないのです。世界中の一人ひとりが大切な存在であるのです。これは私たちのスクールモットーである「隣人愛」の精神にもつながることです。オバマ大統領が広島を訪れたことは、世界中の人々が原爆の恐ろしさについて考える大きなきっかけになったと思います。しかし、今なお、世界には核爆弾を保有する国が多くあります。その脅威を感じながらも、「自国を守るため」に核爆弾を捨てることができずにいます。それは、私たち人間が常に不信感を抱き合っているからです。原爆は人々の命や身体だけではなく、国と国との信頼関係までも壊してしまうおそろしいものなのです。私たちはこのことを深く心に留めておかなければなりません。

今年の「長崎平和宣言」で田上富久長崎市長は次のように語っていらっしやいました。「被爆から七十一年がたち、被爆者の平均年齢は八十歳を越えました。世界が『被爆者のいない時代』を迎える日が少しずつ近づいています。戦争、そして戦争が生んだ被爆の体験をどう受け継いでいくかが、今問われています。確かに、被爆された方々のいない時代は必ずやって来ます。そして、それは遠い未来のことではありません。しかし、だからといって、私たちの原爆や平和に対する意識が薄れてしまってはならないのです。では、私たちにできることは何でしょうか。それは被

爆された方々のお話に耳を傾け、その想いを引き継ぎ、伝えていくことです。被爆された方々は、口にするのも辛い経験を私たちにお話ししてくださいませ。それは「未来を守るため」です。私たち若い世代は、その託された想いを引き継ぎ、次の世代へと伝えていく義務があります。

原子爆弾は私たち人間が生み出したものです。ですから、人間の意思でなくしていかなければなりません。そのためには、まず隣の人を大切にすることが必要なのではないでしょうか。全ては互いを信じ、相手を思いやり、隣人を愛することから始まります。一人ひとりが手をつなぎ合うことで、小さな力が大きな力になります。そうすれば平和の輪はどんどん広がっていくことでしょう。

原子爆弾で亡くなられた方々に哀悼の意を捧げます。そして、未来を担う若者の一人として核兵器のない安全な世界と平和の実現のために全力を捧げることをここに宣言します。

二〇一六年十月六日

宮城学院中学校第三学年一同

校外研修委員会一同

長崎校研実施後に（８）河北新報社による出前授業へその３「長崎新聞をつくらう」を行う。

目的は、長崎校研後、研修での学びを「長崎新聞」というかたちでまとめる方法を学ぶことにある。「長崎新聞」作成を通して被爆講話をうかがって考えたことや長崎の町を歩き歴史や文化に触れて感じたことをどのようににまとめ人に伝えるかを学ぶことを意図している。そのためのノウハウを出前授業によりプロの新聞社から学ぶわけである。

出前授業「長崎新聞をつくらう」の構成は、①「新聞」を発行するということ、②新聞のレイアウトを選ぼう、③どんな記事を書く、④記事として書きたいものをリストアップしよう、⑤前文をつくらう、⑥インタビューの記事を記事にする、⑦より新聞記事らしく書くコツ、⑧見出しを付けてみよう、⑨アタマの記事に見出しをつける、である。

最後が(9)「長崎新聞」作成である。

目的は、①長崎校外研修旅行での学びをまとめること、②自分自身が受け身ではなく、主体的に平和に対する考えを世の中に発信すること、にある。

実際の『長崎新聞』を紹介しながらその特徴について指摘したい。

長崎新聞

つなぐ 平和な世界へ願いを

突願は世界の共通語

届け...祈りの輪

旅えつめる「戦争の残さし」

長崎新聞

二〇一五年五月五日発行

過去を知り未来を拓く

平和な世界へ願いを

つなぐ 平和な世界へ願いを

突願は世界の共通語

届け...祈りの輪

旅えつめる「戦争の残さし」

レイアウトの例として二つの長崎新聞を紹介する。

大見出しが横書きタイプで、記事三つとコラムで構成されている。

前文の例を紹介する。「宮城学院中学校の三年生七十二名は十月五日から七日の三日間、長崎を訪れ校外研修旅行を行った。半年ほど前から取り組んで来た平和学習を生かし、原爆資料館や平和公園などを見学し、平和とは何かを学んだ。また長崎の文化や長崎とキリスト教と関わりも学んだ。」

研修の概要や目的についての確にまとめた前文である。
見出しの例を紹介する。

「強い思い最後の世代へ 被爆者の生の声を聴く」

やはり被爆講話から受けた平和への強いメッセージは中学生の心に確実に届いているのではないか。本文に「中でも多くの生徒が印象に残ったと話すのが七十年前の八月九日長崎の地で被爆された語り部の下平作江さんから伺った被爆講話だ。下平さんは母と姉を原爆で亡くし、その後妹も被爆者としての苦しみに耐えきれず自殺してしまっている。そんな耳をふさぎたくなるような現実を生徒達はしっかり受け止めていた」と書いている。まさにその言葉通りではないだろうか。

「未来へつなぐバトン 戦後70年被爆地訪問」

「被爆者の生の声」「私たちの世代で終わりに」

二〇一五年度は戦後七十年という節目の年であった。その七十年という年月の意味を感じさせる見出しといえる。自分たちが下平さんから平和な未来を築いていく志を引き継ぐという決意を「未来へつなぐバトン」という表現にう

まく表しているのではないだろうか。

「託された平和への『タスキ』」「平和への『一步』」 魂の言葉」「桜に込められた 希望」
見出しから記事のポイントがまっすぐに伝わってくる。

むすびにかえて

本稿では、宮城学院中学校におけるNIE活動を取り入れた平和教育として、『長崎新聞』作成にいたる一連の取り組みについて論じてきた。

『長崎新聞』作成の取り組みのなかで、河北新報社さんの出前授業をいわばオーダーメイドでお願いする活動を取り入れることで、内容の充実した取り組みとなっている。特に本稿で述べてきたように、『長崎新聞』の構成や記事の内容において、NIE活動を取り入れる前はどちらかといえば自分は理解できるが他者には伝わりにくいものであった。しかしNIE活動での学びを踏まえた結果、宮城学院中学校のことをよく知らない人に対しても訴えたい内容が良く伝わる『長崎新聞』になった。いわば本物の『長崎新聞』になったといえる。

最後になるが、学校現場と新聞社の連携のひとつの形としてこれからのNIE活動に寄与するところがあれば幸いである。

〈注〉

(1) 拙稿「長崎校外研修旅行を通して平和について考える―宮城学院中学校三年次における平和学習の取り組みから―」『キ

- (2) リスト教文化研究所研究年報 第四一号(宮城学院女子大学 二〇〇八年)。
日本におけるNIE活動の歩みや新聞社との連携をはじめNIEに関する基本的な理解を深めるものとして、日本NIE研究会『新聞で育む、つなぐ』(東洋館出版社、二〇一五年)
- (3) 宮城学院中学校の実践指定校としての活動の概要は、別にまとめたものがあるので合わせてご参照いただきたい。拙稿「宮城学院中学校におけるNIE初年度の実践報告」『NIE実践報告書 第27号』(宮城県NIE委員会、二〇一六年)、拙稿「宮城学院中学校におけるNIE2年目の実践報告」『NIE実践報告書 第28号』(宮城県 NIE委員会、二〇一七年)、拙稿「宮城学院中学校におけるNIE3年目の実践報告」『NIE実践報告書 第29号』(宮城県NIE委員会、二〇一八年) また宮城県のNIE活動の歩みについては、『NIE実践報告書 第30号』(宮城県NIE委員会、二〇一九年)の「Ⅶ 宮城県NIEの歩み」を参照していただきたい。
- (4) 事前に希望調査を行い、ある程度クラスで偏りがないように分担を決めて行った年度もあれば、自分が一番調べたい項目を自由に選択して行った年度もある。
- (5) 例えば過年度の例として、二〇一四年度には、『真っ黒なお弁当』の英訳(英語)、遠藤周作『沈黙』の学習(国語)、広島女学校の生徒の歩みをドキュメンタリー化したDVDの鑑賞といった取り組みであった。また関連書籍としてジョー・オダネル(写真)『トランクの中の日本 米従軍カメラマンの非公式記録』(小学館、一九九五年)、久知邦『谷口稜嘩聞き書き 原爆を背負って』(西日本新聞社、二〇一四年)、吉岡栄二郎『焼き場に立つ少年』は何処へ(長崎新聞社、二〇一三年)
- (6) これまでのDVD鑑賞の例として、ドキュメンタリー番組「福島のメル友から長崎のメル友へ」、記録映画「二重被爆」山口彊さんの遺言」、DVD「ナガサキの少女少女たち」・「永井博士の思い出」などがあげられる。

付記

本稿は二〇一六年十一月九日に宮城学院中学校で開催された宮城県NIE研究大会での報告「宮城学院中学校におけるNIE

活動を取り入れた平和教育（『長崎新聞』作成にいたる一連の取り組み）がもともになっている。当日、貴重な機会を与えていただいた宮城県NIE委員会事務局の方々に感謝をいたします。さらに質疑応答で有意義な助言や質問をいただいた参加者の皆様にも改めてこの場を借りて感謝を申し上げます。